

戲的特質より超出して漸次に純粹の勉學や勤勞に移行して行つて遂に十四五才の頃に至つて兒童期を去ると共に最早玩具の必要がないものとなるのである。尠くも幼兒教育上に於ける意味に於ての玩具は其必要を減ずるものである。

▲電信の世界一週時間 丁抹コーペンハーゲンの一新聞は各電信線の速度を試験せんが爲めに去月興味ある實驗を爲したり即ち各五語より成る二通の電信を一は東に向け他の一は西に向け共に世界を一週して己れの新報社に到着すべく同時に打電したり其結果上海、紐育倫敦を經由したる東方線は三時間と卅三分を費して歸着し倫敦、紐育上海を經由したる西方線は三十分後れて着したる由にて電信の中繼所は孰れも八個所なりしと

▲世界に人口の溢るゝ時 最近の調査に據れば世界の豊饒なる土地の面積は凡そ二千八百萬平方哩荒野の面積は千四百萬平方哩砂漠は百萬平方哩にして豊饒なる土地一平方哩に二百七人荒野一平方哩に十人砂漠一平方哩に一人を限度として住居し得るものと假定せば世界に人口の棲息し得る限度は凡そ六十億人なり然るに現在の世界の人口は凡そ其四分の一なるを以て現今の人口増加率を以て進まば今後凡そ百六十五年を經過すれば世界の人口溢れて衣食に窮するに至るならんと

○統計學上の結婚

鹽野生

○日本では女の子より男の子が、澤山生れる、その割合は、女千人に男千二十四人であるが、死ぬる事も女よりは、男の方が餘程多い、そしてお仕舞にお爺さんよりお婆さんが非常に多くなるのである。今の所では女より男の方が身体や精神を餘計に使ふ、是等の事がつまり男が女よりも澤山死する原因であらふ。

○結婚の時期に於て男女の数は、どんな比較になるかと云ふに、是も統計で知つた所の日本人の結婚の一番多く行はれる時期即ち婦人の廿歳より廿五歳男子の二十五歳より卅歳までの間に於て、男子の数が女子よりも、三四十万人不足して居る、随分大した數だ、どうです、皆さん大人しくしなければ、お嫁にいけない事になる、………ナニ私達はお嫁なんぞは大嫌ひだ獨りの方が餘程宜いといふ方もあるが、それは大に間違つて居る。

○結婚したものはせぬものよりも、一般に長命じ

やと云ふ事が、是又統計上の事實である、それは恐らく結婚するものは、せぬものよりも身体も健全であり、また精神も健かだからであらうと思ふなせといふのに妻君を貰ふたり、夫を持つたりするのには、誰でも弱い者よりは丈夫な者、頓馬よりは發明のもの、怒りっぽい者より柔和なものと出来る丈氣を付ける、即ち一般に於ては配偶者を得るものは徴兵と同じ様に人選といふ事になるのである、外國などでもミセス／＼と名付ける婦人が非常に多い所で、實際調べて見ると中には結婚せぬ人が澤山ある、即ち婦人として結婚した方がせぬよりも、自然肩身のひろい一例であらうと思ふ。

○此處に結婚に關係して起る所の離婚といふ悲しむべき事がある、そして是は誰でもいふ通り日本一手販賣の姿である、外國では離婚の數は一萬組夫婦に就て何百或は何十などと數へるのじやのが日本では結婚の殆んど三分の一が破鏡に終つて居るのである。

○そして其の離婚の時期が夫婦になつて何年位が

一番多いと調べて見るのに離婚總數の三分の一弱四分の一強は一年以内に別れて居る、外國の離婚は十年位のが一番多いといふ事だが、どうせ別れるものならば、早い方が萬事勝手かも知れないが併し是を以ても、我國離婚の最大原因は互に知る事の不足であつたためであると云ふ事が推し計られるのである。

○夫れに今日交通が便利のために、又一とつ結婚の爲めに不安心な事が出来て來た、なぜかといふに昔は東京でも田舎でも同じ人間が一つの所に、随分永く住んで居たから、お嫁でも貰ふといふ時に、近所に行つて質して見るとあの娘は、あんな顔して居るが、出戻りだとか、夫から家庭の様子まで何でも委しく分つた、此の頃では、あの方は一体何國でせう」近頃此方へか出でになつたんで御座んすが……」「實家は農家でせうか夫ともお勤めで……」「いづれ」近縣の方だといふ事で……」「など、一向要領を得ないです、つまり凡べての事情が不十分で夫婦になつて仕舞ふから、後から意外のほろが出て來るのです。

○以上の事實よりして離婚の一大原因は男子も婦人も適當なる交際の門戸を開きあたへる事の出来ぬからである、しかし其の男女交際の方法に就ては最も慎重なる考慮を要せねばならぬ、今日一般男女の有様と、男子が婦人の、婦人が男子の前に出て少しも怯れず、また慣れたとて戯れわはぬ様にする迄が骨である、男女別ありといふ事が頗ぶる形式的に解釋されて居る様じやが、私は男女交際の場合に於てこそ此の言葉が最も必要であらうと思ふ、即ち男女互へに尊敬して犯さぬといふ事が最も此の「別あり」の意を得たるものでありませう。

▲天氣豫報の起原 各國に氣象臺を設けて天氣を豫報するに至りたるはクリミヤ戦争以後の事なるが獨逸氣象學者ヘルマン博士の説に據れば太古の希臘時代に於ても氣象を豫測して豫報を市中に掲示したるとありメロスタイン市の盛なる時代に雨量計を用びたるとあり英國にては牛津に於て僧侶メーレが千三百三十七年に氣象觀測を爲したるを嚆矢とする由にて其記録は現に同地のロザドレイアン圖書館に存すと云ふ。

此ごろの料理

石井泰次郎

鰹の蓼酢のこしらへかた、
あぢの、うろこをふき、えら及び鰯を出し、洗ひて申をうち、鹽をふりかけて、鹽焼になすなり、たで酢は、たでを摘みてよく洗ひ、摺鉢に入れて摺りなけば摺れたる時、やわらかき飯粒を少し入れて、摺り、よく〜摺りて、酢を程よく合するなり、
焼きたるあぢを皿に盛り、右のたで酢をかけて出すなり、

合蒸しさより

椀 小口松露

合せむし細魚の仕方は、さよりを腹の方より開き骨を取り、小骨をすき取り、しほ水に浸し置き、(鹽水は水二合に、鹽三勺位の割合にてよし、平皿などの中につくり、其中へさよりを並べ入れて置くなり、暫くして取出し、布巾にて水氣をぬぐひ、